# A君と指筆の歩みNO.3 売結編

大阪市立日吉小学校教諭 松崎としよ 中島 亮

### はじめに

2009年A君(当時3年生)が指筆に出会い、自分の思いを表現できることに喜びを感じた取り組みは、「あしあと」55号(平成21年度大阪市小学校特別支援教育担任者会発行)で発表した。

4年生に進級し、指筆は 2010 年ポップコーンという名称で、(株) 墨運堂から発売となり、新聞社やテレビ局から取材依頼を多くいただいた。A君の保護者は、指筆を知ってもらうことが、同じようなハンディを持つ人達の役に立つことであればと、喜んで取材に応じてくださった。何より、A君の輝いた表情が、取材にためらいを持っていた私の背中を押した。そして、指筆の実践をさらに重ねていくことが、A君の望んでいることだと確信した。その様子は、「あしあと」57号で1年間の実践記録にまとめた。

A 君も 6 年生。卒業まで 2 か月足らずとなった。5 年生、6 年生の指筆を使った実践は、そのまま A 君の成長の記録だと思う。その 2 年間の記録を綴ることで、3 回にわたって「あしあと」に掲載した「A 君と指筆の歩み」の完結編としたい。

(注:指筆とは、墨の老舗墨運堂が開発した、直接指に装着して使用する筆である。現在 ポップコーンという名称で発売)

#### 指筆「ポップコーン」







パス式

フェルトペン式

#### これまでの経緯

○あしあと 55 号(平成 2 1 年度) **A くん 3 年生。初めて指筆に出会う。** 

A くんは障害(ジュベール症候群)のため、全身の筋力が弱く、車いすを使用している。 衣服の着脱、食事にも介助が必要である。言語を発することができないので、表情や動 作、音声で自分の意思を伝えようとする。しかし何事も自力でやりたいという意志のは っきりした児童である。

当時絵筆は握った状態で使用。友達が絵筆で絵画表現をしている様子を眺めていた。 握った状態では、線や点が思うように表現できないことを本人が一番わかっていた。そんな折に開発中の「指筆」に出会った。「指で描く新しい発見」とあるように、指の延長として使用できるので、Aくんのように握る力の弱い場合や、握力の弱くなった高齢者にも適した用具として開発された。

初めて出会った指筆に、A 君は夢中になった。腕を下から支えてあげる支援をすれば、思った線や点の表現が可能になったのである。図工の時間が終わっても、いつまでも指筆を離さなかった。3 年生で初体験の書道を書くこともできた。書道で書いた「大」の字は、A 君の喜びを表すように、エネルギーに満ちていた。また自分で育てた、サツマイモも、画用紙いっぱいに表現し、「障害者に学ぶ図工展」に出品し多くの人に鑑賞していただいた。その詳細はあしあと 55 号をご覧ください。



指筆に出会うまでの絵筆の持ち方



初めて指筆(開発中)に出会って線が引けたとき

#### ○あしあと 57 号(平成 2 3 年) **A** くん **4 年生。テレビ取材を受ける**

4年生に進級した年、改良を重ねた指筆が、ポップコーンという商標で発売された。それにともない、A 君に新聞社やテレビ局から取材依頼が入った。開発教材を多くの方に知ってもらうきっかけになればという保護者の希望や、何より A 君の「指筆を使っているところを見てほしい」という強い意志に動かされて、テレビ取材を受けた。私の緊張をよそに、A 君は、実に堂々としていた。「頑張って練習したから見てね」という表情だった。周りが「疲れた」と聞いても即座に「疲れてない」と手を振った。

取材後、筆式の他に、先端がパスやカラーフェルトペンのものがあれば便利ですと墨 運堂に提案した。その提案に応えた商品開発をして、新作が届けられた。(パス用・フェ ルトペン用)。学級となかよし教室のどちらにもこのセットをおき、いつでも一人で使用 できるようになった。なかよし学級で、使い方のトレーニングも行った。トレーニング



テレビ取材風景



一筆目の打ち込みは手を添えて支援



版木に直接、墨線で描いた自画像





指筆の装着の支援

左の2枚の写真でわ かるように、当時は指筆 の装着や、一筆目を書く 場合は、手を添える支援 が必要であった。その後、 学年が進むにつれて、ひ とりで全てやりたい願 望が高まっていく。自発 性を引き出すきっかけ と考える。

#### 自画像を木版にする

3学期が始まった。4年生の図工は、木版で自画像を 彫り、刷る課題である。下絵を筆式に墨をつけて版木 に直接かくことにした。太い筆をつかって自分の顔を 描いた。彫るところを少なくするために、後で、墨の 線を彫って仕上げた。彫刻刀の操作は多くの支援が必 要だったが、自分で描いた墨の線を彫ることで、最後 まで根気よく取り組んだ。友だちに、「似てるね」とい われて、最高に得意そうだった。

\*4年生実践の詳細はあしあと57号をご覧ください。

#### 5年生の実践



画数の多い文字にも挑戦

## 5年生に進級

5 学年になった A 君は、精神面や身体面 でも成長が著しくなった。車椅子から立ち 上がり、教室の端まで、歩くことができる ようになった。書道も画数が多くなったが、 皆と同じ課題にチャレンジを続けた。この 頃になると、下から手を添える支援を少な くした。腕を支える力が向上し、自分で書 きたがる傾向が強くなったからである。特 に撥ねる部分が得意と考えている。

# 様々な表現を楽しんだ1学期



イチョウの木の写生

5年生は、図画工作科で木の写生を行った。創立130 年以上たつ日吉小学校には、大木がある。隣接する日吉公 園にも、大きなイチョウの木が多く、みんなの大好きな遊 び場所である。都会の真ん中にあるが、豊かな緑に囲まれ ており、放課後の公園は、遊ぶ児童の声に包まれている。 身近にあるイチョウの大木を描くことにした。指筆を思 う存分動かして幹をぐいぐい描いた後、図鑑を横に置いて 緑に輝くイチョウの葉を点描で描いた。私が他の児童を見 て戻ってくると、イチョウは緑の葉で茂っていたのに驚か

された。A君は私を見て、いたずらな顔で笑った。人の気



お菓子の箱の模写。

模写は難しい活動である。 しかしチョコビを持参した A君は意欲満々であった。 パス式の指筆でお菓子の名 前や、箱に描かれたキャラ クターに取り組んだ。パス の塗りこみは力が入りにく くて手を添えたが、完成し





6827E

たお菓子の箱を手にして大喜び。左が模写。右が本物の箱。

# A

境内での写生。

#### 秋の写生会

10月。写生会。5年生全員で、近くの神社に出かけた。A 君は指筆と墨をもっていき、境内に座りこみ、神社の建物を紙いっぱいに線描した。友達が「うまいね」と何人ものぞきにきて声をかけてくれる。秋の日差しの下、楽しい時間が流れた。後日、指筆で彩色を行った。左下写真は神社の屋根の美しい緑を塗っているところ。墨線の内側に色を置くコントロールも出来始めた。



弾力のある筆先を使い、屋根の青を彩色。



作品完成!大満足の表情。



パス式トレーニング(奥はスタンドに立てたパス式全色)

#### パス式のトレーニング

1月。パス式の指筆で、風船を表現。 1学期は塗り込みに苦労したので、トレーニングを兼ねていた。パス式は市販のパスを指筆の本体に差し込んで使用できる。全色を本体に差し込み、指筆スタンドに立て、自由に色を選択できるようにした。自力で強く塗り込むことで、指の力や手首の持久力の育成を狙った。



風船2色を塗って、少し疲れたかな



6年生に進級する新年が明けた。図工展出品作品を制作。今年は、墨アート(墨を和紙に垂らしてできる模様を生かした表現)を作

品化した。

自力で、強い塗り込み完成

# 「障害者に学ぶ図工展」の作品づくり

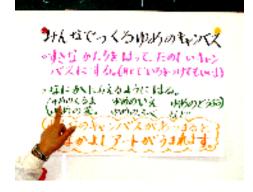


ランプシェード



墨で付けた模様にセロファンで造形表現

墨がにじんで、和紙の上に現れる模様の見立て活動をした。A 君は、あいうえお表を使って、マツタケと指差した。「ほんとだ。 マツタケに見えるね。」一同爆笑!マツタケの傘の下にセロファ ンで軸をつけ、花とお日様も貼った。仕上がった墨アートの紙 をラミネートして筒状に立てて、中にLEDランプを灯した。美 しいランプシェードを、多くの人々に鑑賞していただいた。こ の展覧会は、表現の喜びを共有できる素晴らしい企画だと思う。



#### なかよしアート(卒業を祝う会の作品づくり)

5年生3月。なかよし学級に通級している2名の6年生が卒業式を迎える。「卒業を祝う会」の会場を飾る「なかよしアート」(月1回行う図工の共同作品づくり)として、「みんなでつくるゆめのキャンバス」づくりを計画した。各自がキャンバスに好きな



指筆を使って線描

形を貼ったものを貼り合わせ、卒業祝い会場に飾るのである。

この頃になるとA君は、ぐっと大人びてきた。 「6年生が卒業後は、自分が6年生だ!」と思っているように感じられる場面が見られる。この時もそうだった。夢のキャンバスづくりには、ダンボールを色々な色の線で埋め尽くし、それを切って小片を一杯作る準備が必要だった。 ダンボールに描く線描を、A君が担当した。紙一杯に多様な線を、色を変えて描いた。



線描で埋め尽くしたダンボール板



左のダンボール板を小片へ



小片をコラージュして彩色



はしご車を皆に紹介

A 君は自動車が大好きである。将来の夢はトラックドライバー!夢を込めて、ダンボール片を貼り合わせ、指筆で着色してはしご車をつくった。はしごの先から勢い良く水が噴き出す工夫をした。A 君の頑張りをみんなに紹介した。



#### 6年生へ向けて

3月。もうすぐ6年生。「春には6年生だね! 6年生の字を練習しようか」という私の提案に、 A 君は、六年と自分の苗字をいくつもいくつも 練習した。

面長になり、大人びた表情を見せるA 君は、 指筆の装着は勿論、腕を支えてもらって書くこ ともなくなった。また自力でかなりの長さを歩 行できるようになった。その成長は目を見張る ものがある。

この後6年生になってからは、指筆の指導は、 A 君のなかよし学級担任の中島教諭へバトン タッチしていくことになる。

(松崎としよ)

# 6年生の実践

#### 劇練習のエピソード

6年生になり、普段からの機能トレーニングや体の成長などもあり、バランス感覚や筋力など、身体能力は大きな成長を遂げた。様々なことができる可能性を本人が感じることで、何事も自分でやりたいという気持ちは一層強くなった。そのため、今まで指導者が手を添えながら筆の運びを練習していたことも、「自分でする」と拒否したり、やり直したりする場面も見られるようになった。精神的な成長の表れなのだろうと考える。

6年生ではリハビリを行うための、療育園への長期入園があったため、1学期の間は2ヶ月ほど学校を休んでいた。そのため、6年生での指筆の実践は、かなり機会が少なかった。ここでは、2学期に力を入れて取り組んだ、なかよし学級のお楽しみ会で上演した劇「いろはにほへと」の練習過程での、A君と指筆の関わりを中心に述べることにする。

11月、2学期のなかよし学級でのお楽しみ会では劇上演が恒例となっている。今年は3年生の国語の教科書に掲載されている「いろはにほへと」を発表することになった。A君に与えられた役柄は、お城に住む幼い姫の役である。初めて習字に取り組む設定で、「いろはにほへと」の文字を指筆を使って墨文字で書く。これは今まで指筆に取り組んできた、A君にとって集大成とも言える場面である。「は」の文字は、本番中に皆の前で書く。それを説明すると、A君は練習の段階からはりきって取り組んだ。今までは、指導者が半紙に鉛筆で書いた線を、A君がなぞる方法をとっていた。この機会を生かし、真っさらの半紙に完全

に一人で書くことを目標とした。

いよいよそのトレーニングが開始した。始めは指導者の鉛筆書きをなぞることから始めた。何度も何度も練習した。「は」の最後の画は線が長いため、今までのA君のゆっくりした筆運びでは、筆につけた墨が最後まで続かず、かすれてしまう。また、「は」の右側の丸く返す部分は、A君にとって、複雑な筆運びとなる。できるだけ素早く書き、かつ複雑な筆のコントロールが必要である。それを自力で書くことは、かなり難易度が高い。白い半紙のどこに始点を置くのか、どの向きに筆を進めるのか、まずわからなかった。「ここはこうでしょ!」「スー、ピン!っと。」と声をかけながら、トレーニングを続けた。本番で自信を持って取り組んでほしいと、指導にも熱が入る。

ここで、大きな壁にぶつかった。筆運びを覚えてもらいたいと、手をかざすたびに、A君はかたくなにそれを拒否する。こういう時は信じられないほど強い力が出る。素直に指導を受け入れてくれないA君に、もどかしさも募る。二人の心の格闘とも言える。普段のトレーニングで筋力がついていることを実感する。毎度こうしたやりとりが繰り返された。A君は、自力でやりたい。しかし、文字には決まりがあるので、まず、人の指導を受け入れる心の成長を願った。自由に書きたいA君はこうした指導を受け入れない場面も見られた。指導者としては、教えることが難しい状態となった。

試行錯誤の結果、見えてきたことは、①書く見通しをA君に一つずつその場で納得してもらう。②操作の邪魔はしない。この二点に気をつけた指導法に切り変えた。さらに、書く速さについても、「 $3\cdot 2\cdot 1$ 」とカウントをすることで、速く書く意識を促すようにした。それによって、墨が足りなくなってかすれてしまう問題点も克服できた。

そうやって練習した「は」の文字は、20枚ほどにもなる。A 君にとっては、集中力を要するハードなトレーニングであったと思う。これを乗り越えたのは、本番でみんなに練習の成果を見せたいと願う、熱い思いがあったからだと思う。



トレーニングの数々

#### 劇「いろはにほへと」発表

保護者や先生方が見守る中、A 君はオレンジ色の着物風の衣装にカツラをかぶり、華やかで可愛らしい姫様を演じた。緊張した様子は微塵も見られず、むしろ堂々として、観客に笑顔を見せている。いよいよ、「は」を書く場面である。練習したものの、心配で指導者も後ろからのぞき込む。指筆をとり、真っさらの半紙に力強く「は」を書いていく。いよいよ最後の画。後ろから指導者がこっそり「3・2・1」と声をかける。A 君もそれに合わせて、すっと筆を進めていく。とめ・はねが上手く表現され、勢いを感じる「は」の文字が半紙に書かれた。固唾をのんで見守っていたみんなから、拍手!拍手!崩は大成功のうちに幕を閉じた。忘れられない「いろはにほへと」の文字は、現在もなかよし学級の教室に飾られている。



姫役で登場



いよいよ書くぞ



書けたぞ!大満足!



今も教室に貼ってある作品

(中島 亮)

#### おわりに

「あしあと」に綴った、4年間にわたるAくんと指筆の記録も、これで最後となる。 あどけない表情から、引き締まった表情への変化や、思春期特有の苛立ちの混じった表情を浮かべる時も、それは成長の証しだと思える。

指筆を使った多数の作品の記録は、私にとって何にも変えがたい宝物である。作品1つ1つに、忘れられないドラマがあるからだ。

みんなと同じように表現したい思いが、指筆によってかなえられた時の喜びの表情。みんなに「上手だね!」と声をかけてもらったときに見せた照れくさそうな横顔。うまく書けない時の苛立ち。手を添えられることを嫌がるようになった日。克服出来たときの歓声。表現することで、友達の役にたったときの満足そうな笑顔。

そこには、どんな場合も最後まで物事をあきらめない A くんの強い意志があった。そしてそんな A 君を支援したのは、指筆の教材開発でもあった。この教材が今後も進化し続けて、多くの子どもの可能性を引き出して欲しいと願っている。